

創世記22章「試練から生まれる真実な証し」

1A ただ独りの愛する子 1－19

1B モリヤの山への旅 1－5

2B 神ご自身が備える羊 6－8

3B 独り子を惜しまない父 9－14

4B 約束の確認 15－19

2A イサクの将来の妻 20－24

本文

創世記 22 章を開いてください。今朝は、いつも午後礼拝でしているように、一節ずつ 22 章全体を見ていきます。私たちは、これまでアブラハムの生涯をたどってきましたが、22 章がそのクライマックス、頂点に達します。彼は、神の恵みによって、信仰によって義人とされた人生を歩んでいます。その結果とでも言うてよいでしょうか、試練の中で神に従い、見事に証しを立てました。その証しとは、後世に生きる私たちが知ることとなりますが、神ご自身が父として、独り子キリストをお献げになったという証しです。

人は、試練の時に、その人の中からキリストが証しされます。これから、アブラハムは自分が死ぬこと以上に辛い、試練を受けます。自分の愛する独り子イサクを献げなさいと命じられるのです。しかし、彼はそれを疑うことなく行おうとしました。しかし、彼が知らないうちに、信仰を働かせていて、愛する独り子を献げる父なる神ご自身の姿を現わしていたのです。試練とは、神の心や思い、その深いところを、私たち信じる者を通して表わそうとされる、一手段なのです。

1A ただ独りの愛する子 1－19

1B モリヤの山への旅 1－5

^{1a} これらの出来事の後、神がアブラハムを試練にあわせられた。

「これらの出来事の後」と言っていますが、21 章に書かれている、イサクの乳離れのお祝いなどのことでしょう。かなりの時を経てからということです。そして、「神がアブラハムを試練にあわせられた」とあります。今、話しましたように、この試練は、主の深い思いや心をアブラハムに分かち合いたいという願いから来ています。覚えていますか、主はアブラハムを友とみなして、「わたしは、自分がしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか(18:17)」ということです。主の思っておられることを、アブラハムに分かち合っていると行ってよいでしょう。

^{1b} 神が彼に「アブラハムよ」と呼びかけられると、彼は「はい、ここにおります」と答えた。

「はい、**ここにおります**」というのは、しもべの姿です。主が言われることには、いつでも聞き従いますという姿勢です。英語で、これを availability と言います。いつでも用意できている、ということです。それで、ability ではなく availability だと言われます。何ができるかという能力や才能ではなく、いつでも用意できている姿勢が大事だということです。

² 神は仰せられた。「**あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサク**を連れて、**モリヤの地**に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。」

これが、どれほど衝撃的か、すぐに分かるでしょう。私たちは、これまで、主がどれほど、アブラハムに対して、あなたの子孫によって祝福されると言われたことでしょうか？そして、自分たちでイシュマエルを生んだのに、主は、「サラから出る子が、子孫だ」と言われたのです。そして、乳離れのお祝いの時に、心を痛めながら、ハガルとイシュマエルを家から出て行かせたのです。それなのに、今、その子を全焼のいけにえとして献げなさいと命じられるのです。

しかし、こう言ったらよいでしょうか？主は、「私たちが思いもつかない、さらに大きなことを用意しておられるために、私たちの理解では、ひどいことのように見える」ということです。ラザロのよみがえりについて、思い出してください。主は、瀕死のラザロを癒しにいきませんでした。二日、待ちました。それからベタニヤに行き、すでに死んでから四日経っていました。敢えて、二日待っていたのです。なんて、酷い方なのでしょう！しかし、どうですか、ただ癒すのではなく、主ご自身がいのちであり、よみがえりであることを、ラザロによって証したかったからです。

使徒パウロが、教えました。「Ⅰコリ 2:8-9 この知恵を、この世の支配者たちは、だれ一人知りませんでした。もし知っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。9 しかし、このことは、「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないものを、神は、神を愛する者たちに備えてくださった」と書いてあるとおりでした。」

そして、「**あなたの子、あなたが愛しているひとり子**」と言っておられるところで、何か思い出せないでしょうか？そうです、父なる神ご自身が、愛する独り子をお献げになるというのが、新約聖書での証言です。主イエスが、バプテスマを受けられ水から上がられたら、「マルコ 1:11 **あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。**」と言われました。そして、ヨハネ3章16節です。「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**」アブラハムは、イサクの代わりに、雄牛のいけにえが備えられました。しかし、神ご自身は、事実、ご自分の愛する御子を、罪のいけにえとして、木の上でお献げになったのです。

それから、「**モリヤの地に行きなさい**」と言われます。モリヤのどこの山かは示されていませんが、

モリヤの地です。これは、今の、神殿の丘辺りです。

³ 翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、二人の若い者と一緒に息子イサクを連れて行った。アブラハムは全焼のささげ物のための薪を割った。こうして彼は、神がお告げになった場所へ向かって行った。

ここで、大事なのはヘブル語の接続詞なのだそうです。「そして」という意味がある言葉、英語だと and と同じ言葉が、畳みかけるように使われています。つまり、このアブラハムの旅の準備の行動をヘブル語で見ますと、そこに「何らためらいがない」ということが分かります。

アブラハムの信仰が、主の御霊によって、どんどん強められていったのを見ることができます。パウロがロマ 4 章で、サラに男の子が与えられると言われた後で、何を行ったかを説明しています。「4:19-21 彼は、およそ百歳になり、自分のからだですでに死んだも同然であること、またサラの胎が死んでいることを認めても、その信仰は弱まりませんでした。20 不信仰になって神の約束を疑うようなことはなく、かえって信仰が強められて、神に栄光を帰し、21 神には約束したことを実行する力がある、と確信していました。」まだ、サラが妊娠しているかどうか分からない時から、なんと、神に栄光を帰していたのです。主が語られたのだから、その約束は実行できると確信していたので、まだ妊娠する前に神をほめたたえていたのです。

そして今、ここでアブラハムは、何をもって、何のためらいもなく、旅の準備をしたのでしょうか？「ヘブル 11:19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできると考えました。それで彼は、比喩的に言えば、イサクを死者の中から取り戻したのです。」なんと、アブラハムは、自分がイサクを全焼のいけにえとして屠っても、主がよみがえらせてくださると信じていたのです。だから、ためらいがなかったのです！

そうです、アブラハムはよく考えていました。彼は、イサクから数多くの子孫が生まれ、そして大いなる国民になるという約束が与えられています。これは、約束ですから、必ずそうなると信じています。そして、今、全焼のいけにえとして献げなさいと命じられています。こちら、そうだと信じています。ですから、アブラハムは、心の中で、信仰を働かせて、イサクを死者の中から取り戻すことになると思信じたのです。こうやって、主はアブラハムに、復活の信仰を、この試練の中で注がれたのです。

私たちの神は、いのちの創造主です。ですから、死んだも同然のサラの胎に、イサクを宿すようにされました。それだけではありません。よみがえりの神です。罪によって死が世界に入りましたが、義によっていのちを世界に吹きこみます。その筆頭がキリストです。罪のために死なれたこの方は、死にしばらくすることなく、ご自身の義によってよみがえられるのです。この復活を、アブラハ

ムは信仰の中で思い描いたのです。

⁴ 三日目に、アブラハムが目を上げると、遠くの方にその場所が見えた。

三日かかったのですが、ここには、三日目にイエスがよみがえらえたという証しがあります。自分が息子を屠っても、取り戻していると信じていたのです。パウロが、福音について興味深いことを語っています。「Ⅰコリ 15:3-4 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、4 また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、」この、三日目が聖書にどのように書いているのか？ここです、アブラハムの信仰の中で、イサクは死者の中からよみがえることが起こっており、三日目に、その場所が見えました。

⁵ それで、アブラハムは若い者たちに、「おまえたちは、ろばと一緒に、ここに残っていなさい。私と息子はあそこに行き、礼拝をして、おまえたちのところに戻って来る」と言った。

ここで大事なのは、「私と息子」という主語です。おまえたちのところに、アブラハムとイサクは戻って来る、ということです。つまり、アブラハムは、イサクを屠った後でも、死者の中から取り戻すから、だから二人で戻ってくると言っています。

そして、「礼拝」とは、ひれ伏すことです。主なる神を王としてあがめ、すべてを献げ、明け渡すことです。私たちが、イエスの御名で、このように集まっているのは、まさにその行為をすることです。ひれ伏し、すべてを明け渡し、自分を従わせます。

2B 神ご自身が備える羊 6-8

⁶ アブラハムは全焼のささげ物のための薪を取り、それを息子イサクに背負わせ、火と刃物を手に取った。二人は一緒に進んで行った。

ろばの上に乘せていた薪を、今は、息子イサクに背負わせています。分かりますか、ここも将来ご自分の御子、キリストが、十字架の木を背負って歩かれたことを指し示しています。

⁷ イサクは父アブラハムに話しかけて言った。「お父さん。」彼は「何だ。わが子よ」と答えた。イサクは尋ねた。「火と薪はありますが、全焼のささげ物にする羊は、どこにいるのですか。」⁸ アブラハムは答えた。「わが子よ、神ご自身が、全焼のささげ物の羊を備えてくださるのだ。」こうして二人は一緒に進んで行った。

ここは、とてつもなく大切な、アブラハムの発言です。他のだれかが神のために、ささげ物を備え

るのではなく、「神ご自身が」備えてくださるのです。もっと言うならば、神ご自身がご自身を、いけにえとして献げます。パウロは教えています。「Ⅱコリ 5:19 すなわち、神はキリストにあって、この世をご自分と和解させ、背きの責任を人々に負わせず、和解のことは私たちに委ねられました。」和解させたのは、神ご自身です。私たちにその和解のために必要なことを要求せず、むしろ、ご自身の中で敵意を葬り去られました。キリストにあって、葬り去らせました。これは、ご自身にむち打ち、釘を刺したのと同じです。ご自身と一体である御子を死に渡されたのですから。

3B 独り子を惜しまない父 9-14

⁹ 神がアブラハムにお告げになった場所に彼らが着いたとき、アブラハムは、そこに祭壇を築いて薪を並べた。そして息子イサクを縛り、彼を祭壇の上の薪の上に載せた。

この時は、イサクは幼い少年ではありません。おそらく青年になっていると思われます。20 歳は過ぎていると言われています。そうしたら、アブラハムは 120 歳以上です。今、父はイサクを縛って、祭壇の上に載せていますが、イサクは抵抗しようと思えば、あまりにも容易にできます。おじいさんに青年が肉体的に圧倒できるからです。

つまり、ここには、父アブラハムの神への従順だけでなく、息子イサクにも信仰が働いて、自分は父の言われることに従い、それで神を信じていたことが分かります。アブラハムだけでなく、イサクも、証しを立てていたのです。イエスは、神の御姿でありながら、それに固執せずに人の姿になられ、十字架の死に至るまで従われました(ピリ 2:8)。主は、いくらでも十字架への道をご自身で阻むことができました。ペテロに言われましたね。「マタ 26:53 それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今すぐわたしの配下に置いていただくことが、できないと思うのですか。」敢えて、その道にご自身を従わせたのです。

これらすべてから分かることは、「愛による、自ら進んで行われたこと」です。主は、愛をもってアブラハムにご自身の懐にあるものを分かち合わせ、試練を与えておられます。アブラハムは、愛によって、その思いを全て引き受けて、それで愛する独り子イサクを献げようとします。そしてイサクも、父を愛し、また神を愛するがゆえに、抵抗することなく、そのままアブラハムのすることに身を任せたのです。

愛というのは、このように高次元です。高い次元にあるので、これを一切、強要できません。多くの人が、あまりにも軽々しく、愛のゆえに命じられていることを強要しようとします。例えば、ある人を赦せなくて苦しんでいる時に、「クリスチャンは、敵を愛しなさいって言っているでしょ?」と、あまりにも軽く言ってしまいます。神の深い懐から出ている命令を、私たちは、信仰のもっとも聖い所で、祈りの中で守っていくのです。人から言われて、行えるものではありません。

¹⁰ アブラハムは手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。¹¹ そのとき、主の使いが天から彼に呼びかけられた。「アブラハム、アブラハム。」彼は答えた。「はい、ここにおります。」

主の使いが来ました。すでに私たちは創世記で、主の使いが、主ご自身と一つであることを見てきました。ですから、多くの人が、この方は、肉体を取られる前のキリストが現れているのではないかといます。

そして、アブラハムの名前を二度、呼ばれていますね、「アブラハム、アブラハム」と。これは、親しみを込めて語る時に、そうなります。新約聖書でも、「マルタ、マルタ」とイエスが呼ばれていましたね。親しみがこもっています。そして、アブラハムは、「はい、ここにおります」と答えています。これが、しもべの姿です。

¹² 御使いは言われた。「その子に手を下してはならない。その子に何もしてはならない。今わたしは、あなたが神を恐れていることがよく分かった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しむことがなかった。」

ここです、アブラハムに主が与えた試練というのは、神を恐れるかどうか？という試練でした。あとで、神に聞き従ったという言葉もありますが、ただ、主に言われたからという理由だけで動くことが、神を恐れることです。後に、主はモーセによって、マナを与えることを約束されましたが、それは日ごとに、主に拠り頼むためであり、主の口から出ることばによって生きるためだと、言われました。ただ主に言われたからということでも動くのは、神を恐れ敬っているからに他なりません。

¹³ アブラハムが目を上げて見ると、見よ、一匹の雄羊が角を藪に引っかけていた。アブラハムは行って、その雄羊を取り、それを自分の息子の代わりに、全焼のささげ物として献げた。¹⁴ アブラハムは、その場所の名をアドナイ・イルエと呼んだ。今日も、「主の山には備えがある」と言われている。

雄羊の角で、藪に引っかかっていたのを彼らは献げたのですが、神ご自身はまさに独り子を、そのからだを、私たちの罪のために献げてくださったのです。その場が、モリヤの山です。（正確には、ゴルゴダの丘は少し離れたところにあります。）このモリヤの山の敷地を、ダビデが後に購入します。そこが、主の住まわれるところだと示されたのです。そして、神殿を建てます。そして、そこ、アブラハムがイサクを献げたといわれている地点に、至聖所があったのではないかとされています。今は、イスラム教の岩のドームの中に、そのいけにえを献げたとされる地点があります。

ですから、ここで「主の山には備えがある」あるいは、「主に見られている」とも訳されるこの場所の近くで、神ご自身がキリストを罪の供え物とされたのです。主は見ておられるのです。そして、主

は、ご自分の子キリストが、罪を負われて、「神よ、神よ、なぜわたしをお見捨てになったのですか？」と言われた時に、見ておられました。なおさらのこと、主は私たちを見ておられます。

このようにして、見事に、アブラハムは試練によって、父なる神と独り子キリストを証しを立てました。試練だからこそ、神を恐れ、神に聞き従う機会が生まれます。そこに、信仰を十分に働かせることができます。そして、その従順の中で、主が私たちによって、ご自分を現わされるのです。「ピリ 1:20 私の願いは、どんな場合にも恥じることなく、今もいつものように大胆に語り、生きるにしても死ぬにしても、私の身によってキリストがあがめられることです。」自分の身に、キリストがあがめられるのです。

そして、アブラハムの場合は、さらにキリストの苦しみとよみがえりにあずかっていました。パウロも、それがキリスト者の姿だと教えています。「ピリ 3:10-11 私は、キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、11 何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」苦難にあずかる、という言葉です。あずかるとは「交わりをする」ということです。

アブラハムの生涯のクライマックスは、キリストを証して、キリストの苦しみにあずかることであります。彼はこれまで、多くの失敗をしてきました。けれども、神は見捨てず、むしろ守り、祝福されました。その神の良さをアブラハムは知って、それで信頼を増していきました。その信頼と従順のゆえ、神ご自身が彼にご自身のことを明かしていられました。そして、ついに彼によって、神の受難のみわがが証しされたのです。彼自身もむろん、気づいていません。彼の生きた二千年後に、彼から出た子孫が、苦難の道を歩まれるなど当然思っていないです。でも、信仰によって歩む者には、そうやって、自分で気づかずとも、キリストが証しされるのです。

私たちの信仰の歩みも、目標は、このようにキリストにあずかることです。主から良いものを、おこぼれでいただくのが祝福ではありません。何かをしてもらうことではありません。そうではなく、主ご自身を知ることが祝福です。この方に自分があずかることが祝福です。この方の苦しみにもあずかり、同時に、復活の力も知っていきます。

4B 約束の確認 15－19

¹⁵ 主の使いは再び天からアブラハムを呼んで、^{16a} こう言われた。

主の使いは、アブラハムとイサクが、羊のいけにえによって礼拝を献げている間に、天に昇られたようです。天からアブラハムを呼んでおられます。

^{16b} 「わたしは自分にかけて誓う——主のことば——。あなたがこれを行い、自分の子、自分のひとり

子を惜しまなかったので、¹⁷ 確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の門を勝ち取る。¹⁸ あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたが、わたしの声に聞き従ったからである。」

主ご自身の誓いです。「自分にかけて誓う」と言っていますね。誓う時には、自分よりも大いなる存在にかけて誓います。けれども、神以上の存在はないので、それで、ご自身にかけて誓っておられるのです。神が誓っているのですから、これは本物です。一切、変えられることはありません。ヘブル書に、ここに励まされてくださいと勧めています。「6:18-19 それは、前に置かれている希望を捕らえようとして逃れて来た私たちが、約束と誓いという変わらない二つのものによって、力強い励ましを受けるためです。その二つについて、神が偽ることはあり得ません。19 私たちが持っているこの希望は、安全で確かな、たましいの錨のようなものであり、また幕の内側にまで入って行くものです。」

そして、その誓いと約束の内容は、これまでの約束を確認するものです。アブラハムが、主を恐れ、独り子を惜しまなかった。わたしの声に聞き従った、と神は言われていますが、これは、このアブラハムの従順によって約束があるという「条件」ではありません。アブラハムが不敬虔な時でも、主はこの約束を変えられませんでした。無条件です。しかし、この従順によって、約束をより一層、確かなものとして確証を与えているのです。これが、神の恵みです。私たちは、たとえ不従順であってもその約束は取り消されません。けれども、従順によって、その祝福が確かなものとなります。確実にそうなるのだという、確認が与えられます。

内容について、これまでの子孫が増えることだけでなく、「あなたの子孫は敵の門を勝ち取る」とあります。これは、女の子孫について、主が蛇に対して語られたことを反映しています。女の子孫が、蛇の子孫のかしらを打ち砕きます。悪魔のしわざを、完膚なきまでに無きものにしますのです。キリストご自身が、アブラハムの子孫から出てきて、その十字架と復活のみわざによって、悪魔が敗北し、裁かれます。

¹⁹ アブラハムは若い者たちのところに戻った。彼らは立って、一緒にベエル・シェバに行った。こうしてアブラハムはベエル・シェバに住んだ。

戻ってきてから、アブラハムが住んだのはベエル・シェバでした。かつて、アビメレクと井戸のことで誓いを立てたところです。

ここで不思議なことは、戻って来た時に、明らかにイサクがいるはずですが、ここで言及されていないことです。イサクが再び登場するのは、新しい嫁であるリベカが彼のところに来る時です。24 章の最後に出てきます。

ここに、神のご計画の一端を見ることができます。それは、キリストは三日目によみがえられた後、天に昇られました。私たちから見えなくなりました。神の右の座しておられますが、今は目で見ることができません。イサクが、リベカの前に現れる時まで待つように、私たちも待っているのです。

2A イサクの将来の妻 20-24

²⁰ これらの出来事の後、アブラハムに次のことが伝えられた。「ミルカもまた、あなたの兄弟ナホルに子を産みました。

話は、約束の子イサクの妻になる、リベカの家系についてです。話は創世記 11 章に戻ります。父テラは、アブラム、ナホル、ハランを生んでいました。それで、「11:29 アブラムとナホルは妻を迎えた。アブラムの妻の名はサライであった。ナホルの妻の名はミルカといって、ハランの娘であった。ハランはミルカの父、またイスカの父であった。」ミルカがナホルとの間に、子を生んだのです。このミルカは、ハランの娘だと言います。ハランは、町の名にもなり、テラたちはそこに住みました。そこで育ったのが、ミルカです。

²¹ 長男ウツ、その弟ブズ、アラムの父ケムエル、²² ケセデ、ハゾ、ピルダシュ、イデラフ、それにベトエルです。」²³ このベトエルはリベカを生んだ。ミルカはこれら八人を、アブラハムの兄弟ナホルに産んだのである。²⁴ レウマというナホルの側女もまた、テバフ、ガハム、タハシュ、マアカを産んだ。

これらの子らが、ナホル家におり、ミルカが産んでいます。その一人ベトエルがリベカを生んでいます。彼らが住むのはハランのほう、アラムとも呼ばれる地方です。シリア北部です。後に、アブラハムがしもべをそこに遣わし、お嫁さん探しをさせ、そこでリベカを主が出会わせてくださいます。

こうして見てきました。私たちが、信仰の父としてアブラハムを仰いでいますが、その従順、そして約束の確かさを知り、またキリストを証しすることになるのです。そして試練の時に、その証しが際立つのです。私たちは、格好よく証ししたいと思いませんか？そうではなく、自分の思い通りにならないとき、試練の時に、それでも主に従っている時、自分でも気づかぬうちに力強く、証しを立てているのです。

最後に、一つの具体的な証しをご紹介します。つい先週、アメリカで大きな事件が起こりました。チャーリー・カークさんという、若者に対する保守言論運動を展開していた人が、その集会で暗殺されたことです。彼は何よりも、私たちの主イエスを愛し、信じている兄弟です。カルバリーチャペルに属していました。

死んだら、何によって知られたいか？と問われた時に、信仰です、とはっきりと答えています。政治集会なのに、必ず彼はイエス・キリストのことを大胆に証ししていました。しかし、それだけで

はないのです。彼は、どんなに違う政治主張を持っている人でも、必ず対談で、討論によって語り尽くす人でした。相手がどんなに自分を罵ろうが、いや、襲撃されそうになったし、死の脅しも何度も受けました。それでも、相手に敬意を表し、対等に議論していく人でした。

そこで、私が感動したのは、クリスチャンではない人の哀悼の言葉です。彼はつい最近、ある政党に招待されて、来日しました。そしてそのスピーチを聞いた、未信者であろう方が、こんなコメントを残していました。おそらく聖書の知識とか、キリスト教の背景とかない方なのに、見事に、イエスが私たちに命じていることを、実践しているチャーリー・カークさんの霊性を観察していたのです。

「私はつい数日前のカーク氏の参政党の講演会に参加してきました。若干 31 歳ということで、そんなに期待していたわけではなかったのですが、実際にその人格に触れて驚愕しました。ほぼ 100%アウェイの空気の中でディベートを試みることも 12 年間。どれだけ罵倒の嵐を浴びても退くことなく対立別れすることなく、粘り強く対話を貫き、敵意の中から同士を集める運動を繰り返し続けて来ました。それが彼の言動から溢れて出ていました。後期高齢者の私が驚いたほどです。“敵をも愛する”ということは言うは易く実行が伴う人は皆無に等しいでしょう。それを彼の人格に見たことは大きな驚きと共にこれからの未来にどれほど大きな希望を見たことでしょうか。嗚呼、愛の勇者は倒れました。刺殺者側は、これで終了で済まそうとも、天が彼の闘いを継続するでしょう。」¹

「敵を愛する」ということを、キリスト者でない人が見出すということは、本物です。それぞれが、主に召されたところがあります。置かれている場所があります。そこで、ただアブラハムのように、主に抛り頼んで生きてください。周りの人たちは見えています。キリストが現れています。特に、試練の時には現れています。

¹ <https://tinyurl.com/23wuttj9>